

建築物の寿命と都市

井内昇

昨年9月上旬、1年生20人と信州北佐久の旧宿場町一旧軽井沢、追分、望月、茂田井、及び小諸一を歩いた時のこと。提出された巡検レポートをみると、学生たちがとくに惹かれたのは、戦後の都市化にとり残されて今なお昔の佇みを見せる望月と茂田井の2宿だったようだ。とくに、望月の旧旅籠屋真山（さなやま）家の建物の印象は強かったらしい。この建物は、規模こそ間口5間半、奥行9間と中程度だが、1785年に建てられたものがほぼ完全に残っていて、当時の旅籠屋建築様式を今に伝える貴重なものとして国の重要文化財に指定されている。土間の天井裏に設けられた、物置も同然の屋も暗黒の粗末な下男部屋と上客用のぜいたくな奥の間。そのコントラストから当時の厳しい身分制度は読みとれても、その中で当時の人たちがどんな暮らしを営んでいたかまで想像することは学生たちには難しかったようだ。

1785年といえば今から200年程前のことだが、日本では200年前の一般家屋は先ず殆ど残っていない。それは、木造建築の宿命として火災や自然災害に弱いだけでなく、200年の間に日本人の住様式が大きく変わり、近世の家屋構造は洋風の現代の暮らし方に対応できなくなって取り壊されてしまったからである。だから、200年前の建物で今も残っているのは実用性のゆえではなく、真山家のように歴史的文化財としての価値を認められたものに限られている。

しかし、同じ歴史の古いヨーロッパでは、200年前の一般家屋が今も日常生活で使われているのは別に珍しくない。ロンドンの旧市内も近年ガラス張りの味気ないアメリカ風近代ビルがふえているが、それでも町の建物の半分以上は、100年以上も前に建てられたヴィクトリア時代かそれ以前の古めかしい煉瓦づくりである。BBCの向かい側にある王立都市計画協会やトラファルガー広場に近い都市農村計画協会は、いずれも200年近い古い建物に入っているが、天井は高く室内も広いし、窓も採光に十分な大きさがあり、中に居る限り、これが近世に建てられたものとはとても思えない。田舎に行けばもっと古い建物が使われている。20年程前に泊ったハートフォード市のSホテルの建物は1570年建築の「時代もの」で、さすがに客室の床は傾き、鉛筆を落したら部屋の隅

に転がっていったという代物であったが、それでも県庁所在都市（といっても人口2万だが）ハートフォードで最も格式の高いホテルとして繁盛していた。（1981年に訪れたらまだ営業していた）

この日・英両国の（一般化すれば日・欧の）の建物の寿命の違いは、彼我の町の違いを生み出す大きな原因のひとつのように思う。一旦建てられてしまうと百年以上にわたってその土地の利用が固定される可能性が大きいヨーロッパでは、建築当事者たちは必然的に時間的、空間的パースペクティブを持たざるをえないが、寿命がせいぜい30～50年と見込まれる日本では、家屋はすぐ置きかえられる一時的な構造物と考えられているから、その立地の選定に慎重さが欠け、周囲との調和にも無関心になりがちである。「さてはやは、ながらへ住むべき…」という兼好法師の住居観は、今も日本人の心の片隅に残っているのかも知れない。

このように、住区或いは町全体との調和についての関心が薄い建築当事者たちによってつくられてきた日本の都市が、近年次第に不燃のコンクリート建築でおもわれはじめている。それにもかゝらず、当事者たちの住区、町全体への関心の薄さは、依然として木造建築の時代と変わっていないのではないだろうか。このまゝでは、日本の市街地の混乱、とくに過小宅地がまわりとの調和もなく無秩序に広がる土地利用パターンは、今後半永久的に固定されてしまうのではないかと案じられる。昨秋訪れた沖縄の都市は、まさにその悪い前例といってよいであろう。もっとも、日本では鉄筋コンクリート建築でさえ寿命はせいぜい50～60年であるという。或る建築家が、数十年後の取り壊しの時の手間を省くため予め要所に火薬を仕掛けておくプランを発表した、という記事を読んだことがあるが、彼らにしてみれば、不燃ビルも遠からず取り壊すものに過ぎないらしい。住様式が急速に変わりつゝあり、とくにOA化の進行や空調その他の附帯設備の進歩で建物の旧式化が早まってきていることは事実である。だから、建物の経済性、効率だけを考えればその方が賢明かも知れない。しかし、建物も使い捨てとなれば、質の良い社会資本の蓄積は仲々進まないのではないかと思う。